おきたま米づくり情報　No.４

令和７年５月８日
やまがた温暖化対応米づくり日本一運動
置賜農業技術普及課
西置賜農業技術普及課

5/13～5/20 の気温は平年より高くなる見込みです（気象庁、5/８発表）。
天気の良い日に田植えを行い、適切な管理で初期生育を確保しましょう！

1　適期の田植えと適切な管理

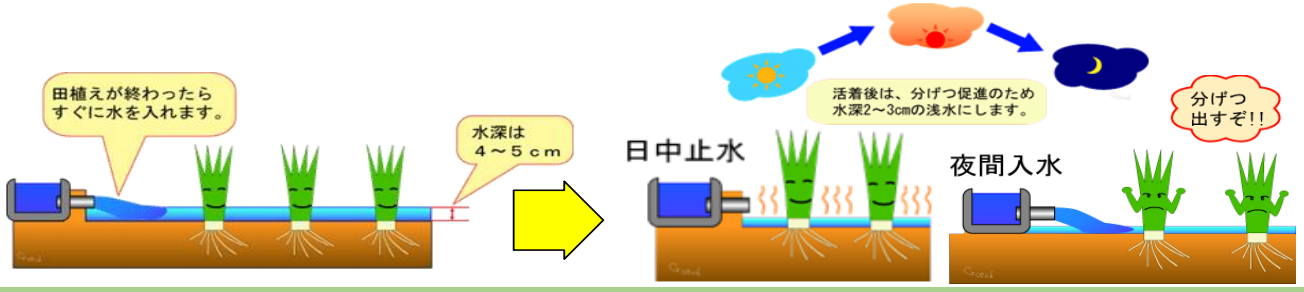
田植えの適期は 5/15～5/20 頃です。（晩限は 5/25 を目安に。ただし「つや姫」は 5/20 まで）

田植えは天気の良い日に適切な栽植密度で

○田植えは、低温や強風の日を避け、天気の良い日を選んで行いましょう。
○**植込本数は㎡当たり 100 本程度（70 株/坪、株当たり 4～5 本）**を目安とします。
○**植付け深は 3cm 程度**を基本とします。（深植えは分げつの発生を抑制するため避ける）

こまめな水管理と異常還元（ワキ）等の対策で初期生育を確保

○田植え直後は、4～5ｃｍ程度の水深とし、活着を促進させます。活着後は、2～3ｃｍの浅水管理とし、日中止水・夜間かんがいで昼夜の温度差を大きくして分げつの発生を促進させます。
○晴天・高温が続く場合は、２～３日おきに水を入れ替え、ワキや表層剥離を抑制します。
○**ワキの兆候が見られた場合は、速やかに水の入れ替えや夜間落水**を行いましょう。



2　病害虫防除・雑草防除のポイント

箱施用剤の適正使用と補植用取置き苗の速やかな除去

○プール育苗の場合は、田植え前の落水後に箱施用剤を散布します。
○育苗ハウス内で野菜等の後作を予定している場合は、育苗箱をハウスの外に出してから箱施用剤を散布します。
○補植用の取置き苗は、いもち病の伝染源となります。補植作業は田植え後１週間以内に行い、**取置き苗は速やかに処分**しましょう。

除草剤の適正使用で効率的な雑草防除

○**昨年（令和６年）は、置賜地域の多くの圃場でノビエの残草が確認され、稲の刈取りの際苦労された方も多かったのではないでしょうか。残草は倒伏の原因になることに加え、翌年作に種子を残すことになります。昨年多く残草した圃場では、特に注意が必要です。**
○次のページに除草剤の使用方法のポイントをまとめましたので、ご確認ください。
※箱施用剤と除草剤（１キロ粒剤）の取り間違えに要注意。散布前によく確認しましょう。

春季農作業事故防止啓発運動　展開中！ トラクターや田植機等の事故に要注意！

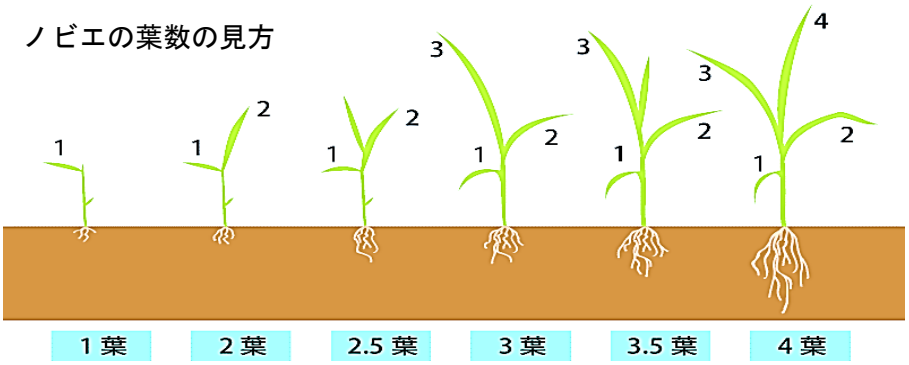
○安全確認と予防対策（ブレーキ連結等）で公道でのトラクターによる事故を防ぎましょう。
○圃場へ進入する際は、畦に対し直角に進入する等細心の注意を払いましょう。
○**熱中症にも要注意**。こまめな休憩と水分補給。ゆとりをもった作業を心掛けましょう。

除草剤の上手な使い方　ポイントは「散布時期」と「水管理」

○ 除草剤の適期散布

除草剤には、枯らすことができる雑草の大きさ（葉数）に限界があり、限界を超えた雑草に除草剤を撒いても、効果不足になって残草してしまいます。水田内の雑草は生育にばらつきがあるので、水田全体をよく観察して、水深の浅いところ等、生育の進んだ雑草を目安にして適期を逃さずに散布するようにしましょう。なお、水田雑草は代かき直後から発生し始めます。

また、気温が高く日照時間が多い年は、雑草の葉数がどんどん進むため、例えば「去年と同じ時期に散布した」場合でも、きちんと効果が出ないことになります。

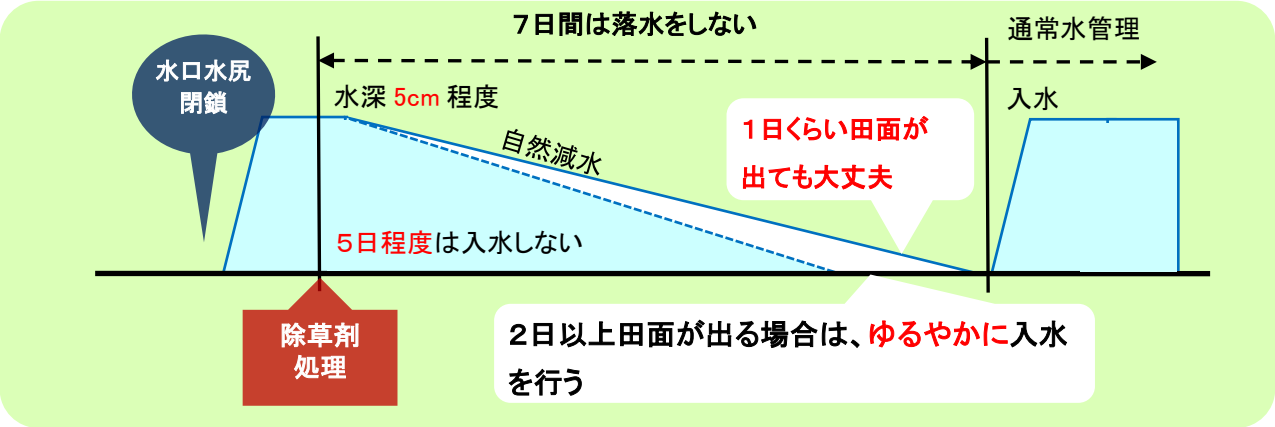


◎代かき（本代）から田植えまで時間が空く場合は、代かき後に「初期除草剤（※）」を散布するのも一つの手です。ただし、初期除草剤であっても「散布後７日間止水」しなければなりませんので、田植えの日程を考慮して散布しましょう。
※ラベルに記載のある使用基準を確認すること

以上のことから、「目視で確認できる雑草の葉数まで除草剤の散布を待つ」「去年と同じ時期の散布」ではなく、散布できる使用時期に「早めに散布する」ことが効果を安定させるポイントになります。

○ 水管理の徹底

水稲除草剤は水を介して土壌表面に処理層をつくるので、その処理層がしっかりとできるまでは、水深をきちんと保つ必要があります。このため、除草剤散布時には、水口・水尻をしっかり止め、散布後７日間は落水、掛け流しを行わないようにします。もし、自然に落水して田面が露出するようなら、せっかくできた土壌表面の除草剤の層を壊さないよう、ゆっくり入水します。



○ ジャンボ剤、豆つぶ剤、フロアブル剤を散布する時のポイント！

近年、ジャンボ剤や豆つぶ剤のように拡散性の高い除草剤が増えてきています。この剤は、水深が浅いと薬剤の拡散が不十分となったり、投入地点に除草剤成分が集中し坪状の薬害発生の原因となったりするので注意が必要です。

- 薬剤がうまく拡がるよう、水はたっぷり多め（水深５～７ｃｍくらい）に。
- 表層はく離、アオミドロが発生した時は、薬剤の拡散が不十分になります。
  雨上がりなど、藻が落ち着いたタイミングで散布しましょう。
- 水田の水が片寄るほどの強風が予想される場合は、散布を避けましょう。